

認知症の人は、どんな想いで暮らしているのでしょうか

品川区で、講演などで活躍する本人の声をご紹介します。



後藤 智 さん

52歳の時にもの忘れが起こり、医療機関を受診したところ、認知症と診断を受ける。現在は、本人ミーティングやミーティングセンターめだかの会などで仲間とともに活動。

診断時には、どうやって家族を養っていくのか、もうダメなんだな、と思いました。夫婦でちょっとしたことでも言い合いになりました。妻と自分だけでは世界が狭くて、

ある時は絶望を感じていました。

でも、**他の本人や家族と出会う、気持ちが前向き**に変わってきました。

皆さんと集まると楽しいし、絶望的な気持ちは生まれてこなくなりました。

これからも、**楽しくみんなで、ニコニコしながらやりたい**と思っています。

好きなことは、書道です。

品川区で教室の先生もやっていました。

ビールやイカ刺しも好きです。

楽しいことは大好きなので、気分が乗ります。

つながりが広がって、

色々な人とお会いしてお話できるって

幸せなことだな、と思います。

仲間の話を聞くと元気をもらえます。

これからも、**元気を出して、頑張ります!**



岩田 美枝 さん

30年以上書道塾を経営し、子どもから大人まで指導。グループホーム入居後も地域の子どもたちを対象に書道教室を開催するなど、書道の魅力を発信。令和3年9月からは「とうきょう認知症希望大使」に任命。本冊子の表紙に掲載している書「認知症とともに生きる」も揮毫。



三者三様！絵で魅了する人たち

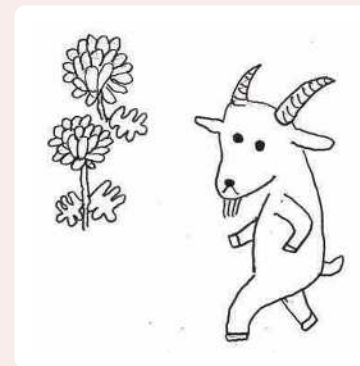
「絵を描くこと」は、誰もが気軽に楽しめる趣味のひとつです。本人が描いた魅力的な絵を、本人のコメントとともにご紹介します。

目覚めたときに見えた幻視を描いてみた

レビー小体型認知症の特徴である「幻視」が見えるようになり、イラストで記録しておこうと描いたものが、いつしか1,000枚以上になりました。花、動物、幾何学模様、人物、建物等様々な幻視が出現し、怖いものはほぼないので、幻視と楽しく付き合っています。

三橋 昭 さん

映画の助監督、会社員、自営業を経て、大田区立図書館の館長を務める。レビー小体型認知症と診断され、幻視が見える日々が続く。



絵にハマリ、始めて数年間で個展まで

病院のデイケアで芸術療法に出会い、アトリエで絵を描くようになりました。故郷の原風景を表現した絵には、様々な思い出に今の自分を描き込んでいます。描く人によって筆遣いや色使いが異なるので、仲間と一緒に描く時間も良い刺激になっています。これからも、絵を通じて人と出会い、季節の変化などを感じながら、楽しんでアートが続けていきたいと思っています。

柿下 秋男 さん

経歴については、前掲(⇒2ページ)本冊子の表紙に掲載している絵も制作。

出会う人に似顔絵を描くと、喜んでくれる

子どもの頃から絵が好きでした。社会人になって所属した水泳クラブの仲間の似顔絵を描いたのがきっかけで40年以上似顔絵を描き続けています。「似てるね」と喜んでもらえるのが嬉しくなります。

S.K さん

品川区在住。仕事で建築、設計、マンション管理の資格を多数取得。今でも資格集めが趣味で、毎日図書館に通って勉強に励む。

